

工藤哲巳×カロール・ラマ展
ファーガス・マカフリー東京にて開催

ファーガス・マカフリー東京
2018年6月26日～8月4日

この度ファーガス・マカフリー東京では、「Kudo / Rama」展を2018年6月26日から8月4日まで開催いたします。

斬新かつ挑戦的で、生物の形態のような立体作品で知られる工藤哲巳(1935 - 1990)と、性=心理的なアサンブラージュ、絵画、そしてドローイングを独学で描いたカロール・ラマ(1918 - 2015)の作品を、立体と平面合わせてご紹介いたします。



本展覧会では、1962年から2000年までに制作され、今日、私たちが直面している最も切迫した課題——対

人関係、社会的、または環境学的なトラウマ——を予見する作品群25点を取り上げ、日本およびイタリアの両作家の革新的な洞察力と実践を探求いたします。

工藤とラマが共有する極端な感受性と、素材とマテリアルに対する破壊的ともいえる姿勢は、両者の作品を並べて観賞することでよりあらわになります。多種多様なファウンド・オブ・ジェクト(「見出された対象」)を不気味に組み合わせることで、ひとの身体性と精神性の深みを探求し、制作を通じてポスト・ヒューマン(人間以降[の存在])の美的可能性を示唆しています。

作家としてのキャリアの中で、両者の関心事は、唯物主義、セクシュアリティ、暴力性、そして消費主義などといった現代社会に生きる私たちにも広く深く関わる事柄ばかりです。しかしながら、政治性や倫理感に強く訴えかける作品ではなく、むしろ、「生きる」ということはどういうことなのか、という問いに対し、彼らは独創的かつ個人的な解釈を提示します。この普遍的な問いに挑む姿勢が、多くの現代美術作家の意欲の掻き立て、支持者を増やし、近年の関心の高まりにつながっているのです。

20世紀、散在していた美術的傾向を独自の奇抜さと謎めいた作風と実践で横断した工藤とラマは、個としての構想そしてヴィジョンに忠実であることで、既存のカテゴリーに安易に還元されることを拒否してきました。ジェンダー、セクシュアリティ、エコロジーなどを特定づけるあらゆる条件や要因を取り上げつつも、彼らが捉え、提示する問題は、原型性、精神性、そして顕現性といった、普遍的なものなのです。

工藤哲巳

1935年、大阪生まれ。第二次世界大戦直後の急進的な東京アートシーンにおいて存在感を増していった工藤哲巳は、1950年代の「反芸術」の文脈においてよく語られますが、同時代の作家のなかでもとりわけ既存の概念や伝統から常に決別しようとした点で、真に革新的な作家の一人といえます。1962年にはパリへ移り、批評家のジャン＝ジャック・ルベルや作家のアラン・カプローを通じハプニング運動に関わります。

その後40年にわたり、人工的で生物学的な形態を混合させ、不快感を呼び起こすような彫刻作品群を日常品やファウンド・オブジェクトを用いて制作するようになります。それらの作品を通し、工藤の著しくポスト・ヒューマンな思考、そして彼の「新たなエコロジー」への展開が見られます。

性的なものを想起させる形態や素材を用いながらも、工藤の仕事は人間が持つエロティシズムについてではなく、「性のグラウンド・ゼロ、文化のグラウンド・ゼロを探す」という、「ポスト・セクシュアル」な指標への試みであり、物質性、生得性、そして自然主義などへの探求を示しています。

溶けた肌、切断された手や目、そして溢れる内臓などの強烈な描写は、作家が考えるポスト・アトミック(原爆以降)の「身体(性)」であり、自然の絶え間ない変態(メタルモーフォーゼ)を鑑者に喚起させます。

工藤の生態学的な作品は、暴力的なまでに不自然(または非=自然)であり、あたかも近未来の原子力をめぐる社会環境下で、身体の部位が有機物や電気回路、大量消費の産物と融合し、テラリウムや温室状の容器に収められているかのようです。

これらのグロテスクで異世界を想起させる作品群は、環境汚染やユートピア／ディストピア、そしてポスト・ヒューマニズムなどの問題を取り上げている今日の環境芸術の先駆けとも言えるでしょう。

近年では、2008年にウォーカー・アート・センター(ミネアポリス)にて「Tetsumi Kudo: Garden of Metamorphosis」展という大規模な回顧展が開催され、2013年には「あなたの肖像: 工藤哲巳回顧展」が国立国際美術館で開催されました。

カロール・ラマ

1918年、トリノ(イタリア)生まれ。水彩、義眼、使用済みの自転車タイヤ、剥製や熊の爪や牙などの素材を用いて、カロール・ラマは70年にわたり身体、セクシュアリティそして欲望などの領域を実践の中で探求してきました。



彼女のサイコ・セクシュアル(性的行為の心的表示)な絵画やドローイング、そしてアサンブラージュ的な抽象画は、近年ようやく世界の美術界から注目されるようになり、2003年のヴェネツィア・ビエンナーレで金獅子賞受賞、2015年のパリ市立近代美術館で「The Passion According to Carol Rama」回顧展、そして2017年ニューヨーク、ニュー・ミュージアムでの「Carol Rama: Antibodies」での回顧展へとつながりました。

エロティシズムや抑圧、狂気や解放といったテーマを取り扱うため、ラマの作品は長い間、破壊的とみなされてきました。露骨な性的描写、精神障害者に対する電気ショック療法のイメージや、残虐性の描写などは、1930年代・40年代イタリアのファシスト政権下では検閲されていましたが、ラマのこれらの作風は、監禁や抑圧に対する女性の性的抵抗の爆発を象徴しているのです。

ラマの1960年代の「ブリコラージュ」絵画は、オブジェクト(卑しむべき)要素と不気味な要素を併せ持っています。動物の皮は、人を惹きつけると同時に不快にさせ、また作品の表面に取り付けられた注射器や人形の目玉は観者を脅すと同時にじっと見つめます。

自身の家族の精神的・身体的苦悩を毅然として掘り下げることで、ラマは普遍的意識の境地に到達しています。

1970年代の作品の多くは、タイヤのチューブ(インナーライナー)を使用していますが、それらは治療された腸、萎えた男根、また負傷した皮膚を思わせます。後の具象作品のひとつである〈Mad Cow〉シリーズでは、狂牛病を発症した牛の顎や歯、そして人間のそれに似た牛の乳房などのイメージを用い、1990年代のヨーロッパ農法によって、恐ろしいほどに汚染された生態系を批判しています。

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは、2006年の設立以来、元永定正、中西夏之、白髪一雄、高松次郎など、戦後日本美術の国際的な評価を確立させる上で中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行っています。

プレスのお問い合わせ:

ファーガス・マカフリー東京

T: +81-(0)3-6447-2660

E: tokyo@fergusmccaffrey.com

ファーガス・マカフリー(ニューヨーク本社)

T: +1-(212)-988-2200

E: press@fergusmccaffrey.com

写真

1. 工藤哲巳《遺伝染色体の中のプロムナード》1979年、プラスチック、金属の籠、板、土、樹脂、のり、セルロース、4 5/8 x 15 3/4 x 10 5/8 インチ (37 x 40 x 27 cm)
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 C2257
2. カロル・ラマ 写真: ©PEPE fotografia、提供: PEPE fotografia

ギャラリーマップ

